東京バッハ合唱団 月報

［第526号］ 2006年4月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-17-21-101 Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732
E-mail：bachchortokyo@aol.com http：//www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.526
April 2006
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

1年後の《マタイ受難曲》 ― どのような演奏を目指すのか？

大村 恵美子

創立20周年（1982年）に私たちが《マタイ受難曲》を演奏してから、来年（創立45周年）は2度目の公演である。最近、練習用に1982年の録音ＣＤが出まわって、またかつての演奏の記憶がよみがえってきた。当時参加して現在も残っている団員は10名ばかりで、ほとんどが新しい人たちといってよい。これまで小沢征爾などわずかな数の日本語演奏はあったが、私の訳ではあれいらい聞く機会もなく、原語演奏を豊富に味わったひとびとにも、日本語での挑戦は新鮮なものにちがいない。

大きな経済的負担や大規模な演奏者の統率など、外面的な困難はいくらでもあげられるが、《マタイ》上演に不可避の、そのような条件を整えることは、今回は早い時期から団員の自主的な運営にまかせた。ここで考えたいのは、もっぱら作品そのものの、演奏内容に関する点である。

1982年のときは、かなりの短期間に、訳詞作業から会場探し、演奏者の選定と交渉、児童合唱のまとめなど、ほとんど1年間、毎日のように実現にとりくんで、白熱のいきおいで引っ張っていった。団員の話でも、流れる涙をおさえる余裕もなく感激しながらコラールを歌い、また後日発行された録音テープを、毎晩のように聴きながら就寝するという後援会員もいらした。英字新聞にもたいへん好意的な評が載り、そのせいもあって、翌1983年夏の第1回ヨーロッパ巡演には、シュトゥットガルトのヘルムート・リリング主宰バッハアカデミーで、モテットを演奏するようにとの依頼を受けることになった。

その大成功の成果を、今こうしてＣＤで聴いてみると、たしかに、ああ、よくやったものだ、と、他人ごとのようにまず感心するのだが、それをこれから乗り越えねばならない、厳しい視点から目を向けると、当然のことながら、いろいろな問題点が見えてくる。まず、一年中身近にこの作品を聞きながら過ごせるヨーロッパなどではあり得まいと思われるような、個々の曲のテンポのとらえ方の不慣れさが処々にあって、ハッとする。この20数年間に《マタイ》の演奏も飛躍的にふえて、東京でもまだ一大イヴェントのようだったあの頃のようなこともなく、演奏者の硬さは、だいぶ解消されていることだろう。しかし、日本語で音楽をはこぶとなると、そこにある緊張感は、むかしも今も変わらず大きいにちがいない。

私は1982年のとき、よく意味を伝えるためにも、コラールなど、たっぷりとしたテンポをとった。しかし、ゆっくり歌うには、それだけ強靭な内容把握と表現の意志力が必要である。やはり曲に負けている感じのするところもある。ていねいな表現は変えずに、もっとテンポを上げてみたほうがよいかもしれない。また、各曲をつなぐ間隔も、たたみあげてゆくことを心がけたつもりだが、もっと鋭くすばやい場面転換をして、緊張感を増したい。（逆に、イエスの臨終の場面など、なるべく長い沈黙をおきたくて、じっとしていたら、「もう終わったの？」と、小さいながらはっきりした幼児の声が、前列の客席から聞こえてきて、あわてて次ぎにすすんだこともあった。）

こんどの場合は、安全運転の印象をなるべくなくして、軽快なテンポで曲をつないでゆきたい。それに付随して、曲の開始と終結の休符の間隔を、鋭くあざやかにとりたい。現在でも、本番ではやっと到達するものの、練習中の、つまり持ち前の団員方のテンポ感は、私自身のそれにひきかえ、かなりゆったりして太平である。いつもの生活ではよしとするスローライフのテンポ感を、演奏時にはガラリと変身させてもらいたいものだ。スポーツ選手が、無意識に動けるようになるまで、機敏な動作を何百回とドリルして身体にたたきこむ、あの迫力に欠けている。

25年前には合唱団の平均年齢も若く、発音など今にくらべて幼く未熟なところもあるが、全体に勢いがあった。しかしそれにしても、外国の名演奏にくらべると、メリハリに欠けて、何よりも‘お人好し’という印象が強い。このお人好しさは、日本人全体の個性ではないかと思うが、平板につながるのである。イエスの弟子だろうが、パリサイ人だろうが、荒くれた群衆だろうが、どれも皆ひとしくわが仲間あつかいの声しか出ない。つまり、歌で演技し表現することが希薄なのだ。

全般に加齢している現在、重ねられた人生経験は、人間洞察の深さ広さとなって、彫りのある表現を豊かに伝えるようになっているだろうか。むしろ日常においては、加齢とともに物わかりがよくなり、ぶつかり合いを避けるようになり、「見るべきほどのものは見つ」の心境で、ますます角のとれた、円熟というよりはむしろ、個性をひとに押しつけるのを恐れるあまりの、ひ弱でつまらない歌となりやすい。

ここが大事なのだが、芸術のなかに生きることは、別次元のことである。悟りきってはいけない。自己を脱して、大いに喜び、悲しみ、なげき、怒り、飛躍しなければならない。日常的、散文的自己をなげうって、自由に動きまわらなければならない。その音楽が自分の世界とは遠いから

といって、借りてきた猫のようによそよそしくなってはならない。

そのうえさらに――これこそもっとも大事なのだが――、音楽中、劇中の人物・役割に惑溺してはならないのである。しっかりと批判的距離を保ちつつ、群衆や弟子や信徒その他を、描写ではなく表出するのである。受難物語の道筋を、ゆきがかり的・短絡的に騒いだり嘆いたりののしったりするのではなく、クールな把握のうえに立って、端然と聴衆に伝える。――そんなにむずかしいことを！　どうすればできるようになるのだろう。それには長い期間の集中がいる。知的にたくさんの本を読んだりするのは、だれにでも奨められるものではないが、バッハの書いた作品を、ただ忠実に歌おうとする態度にとどまらないで、自分自身が歌唱百遍、そのすえに到達する共感を、心からの同意にささえられて噴出させるのである。そういう、長期に溜めこんだ強力なエネルギーが、バッハ演奏にはぜひ必要である。だれかの指示をなぞるのではない、自分自身のことばと音になりきったものを、ほとばしらせるのである。そのために、各自、自分なりの独自のやり方を工夫し、編み出して、この1年、ささげつくしていただきたい。そうすれば1年後の《マタイ》の大成功は、まちがいなしである。

お・た・よ・り

「ＣＤ50曲選」第4期

小杉 茂（後援会員）

今回は有名曲が多く、小生の大好きな曲ばかりでたいへん嬉しく、とくに第131番《深みより 主よ われはなれを呼ぶ》［第15巻に収録，第45回定期演奏会1979年］は、以前より愛聴しておりました「ヘレヴェッヘ盤」よりはるかに素晴らしい出来映えで、音楽的にも表現性でもすぐれた演奏といえるのではないでしょうか！

そして第1曲、第3曲、第5曲が合唱であることや、第2曲の「バスとソプラノ斉唱コラール」、第4曲の「テノールとアルト斉唱コラール」の、それぞれの掛け合いは、歌詞をみながら聴いていると、まさに鳥肌がたつような恍惚と陶酔感で、われを忘れる法悦のひとときであります。5曲全部に合唱が登場し、まさに「東京バッハ合唱団の〈黄金盤〉」だと思います（合唱の一語一語もはっきり聴こえ、客席の雑音もほとんどなく）。

それにつけても、訳詞のすばらしさは、聴けば聴くほどまさに神業的で、バッハの霊がのりうつったのではないかと思われるくらい、訳語の一語一語が一音一音にフィットし、逆に、バッハが訳語に音入れしたのではないかと錯覚させられるようです。

ドレスデンより

ワルブレヒト 滋賀 幸子

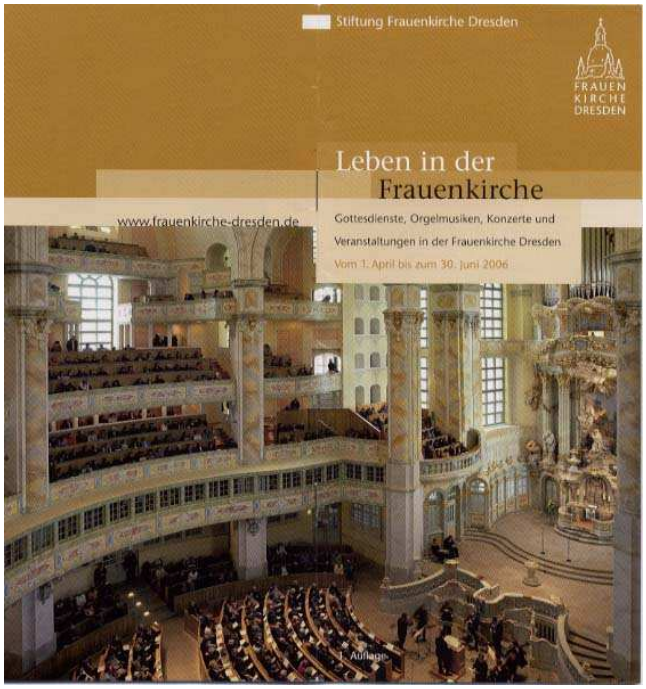
桜の美しいころと思います。お変わりありませんか。

先日はバッハ・カンタータのＣＤをお送りくださいまして、どうもありがとうございました。2001年5月12日録音［第16巻，89回定期］のカンタータ第140番《目覚めよと呼ばわる 物見の声高し》は、［東京最後の］思い出の曲で特別の気持ちで聴きました。またカンタータ第68番《み神はこの世を かく愛したまえり》は、主人と奈々がオーケストラで、すみれは合唱団の一員として家族3人が同時に出演させていただいたときの録音ですね[第9巻，69回定期1991年]。なつかしいカンタータの一つです。夢中ですごした東京での生活を思い起こしながら聴きました。

石橋メモリアルホールで聴かせていただいたバッハ合唱団の数々の（数えきれないほどです）定期演奏会は、私にとっても好影響をあたえてくださったと感謝しております。時間と仕事の関係で当時は合唱団に参加できなかったのですが、ドレスデンに住むようになって近所の教会の合唱団に入り、歌うようになって5年目になります。ときどきカンタータも歌っています。

私にとっての一大事は、昨年の1月以来、フラウエンキルヒェ(*)の合唱団に（公募があって試験され）入団できたことです。昨年10月の献堂式のときも第1大合唱団のひとりとして歌ってきました。今年の2月17日にはブラームスの《レクィエム》をオーケストラの伴奏で歌うことができ、また、9月にはメンデルスゾーンの《パウルス》が予定されていて、今猛練習中です。コーラスの中では1940年生まれのソプラノの人と私とが最高齢者で、いつまで続けられるかは分かりませんが、とても楽しく水曜日の夜の練習に通っています。フラウエンキルヒェでは月に1、2度、礼拝のときに奉仕していて、家で「音取り」や発声練習に励んでいます。

厳しかった冬もおわり、やっと暖かくなったと思ったら春の雪解け洪水で、今日、エルベ川の水位が一番高くなる



(*) FRAUENKIRCHE［ドレスデン聖母教会］：第2次大戦終結直前の大空襲で崩れ落ち，旧東独政府は戦争警告の碑として瓦礫の山を残しておいたが，ドイツ統一後に浄財を集めて再建が始まり，昨年完成したばかり．写真は，滋賀さんが送ってくださった最新のパンフレット．

と言われていて心配しています。地下水の水位も高くなっているという警告も出されていて―2002 年の大洪水のようにはならないという予報ですが―心が痛みます。やっと大洪水の傷跡がなくなってきたところなのに…。

私どもより合唱団の皆々様にくれぐれもよろしくお伝えください。

PS. 奈々は、2 歳半と 6 ヶ月の娘たちの母親になり、ケムニッツのシューマン・フィルハーモニーのオケの仕事を 3 月末に再開し（半分の量にしてもらい）、がんばっています。すみれは卒論を書いています。

ゲルハルトは、昨年 8 月から 1 年契約でドレスデン国立オペレッタのソロヴィオラの仕事をしていて、多忙ですが元気です。

渡邊 明 氏の「白鳥の歌」

大村 恵美子

3 月 16 日、サントリー小ホールでシューベルトの歌曲集「白鳥の歌」が、渡邊 明 氏によって歌われた。渡邊氏独特のダンディズムで、この日のプログラムにも、このリサイタルについてのコメントは何ひとつ書かれていなかったが、一般に「白鳥の歌」というと、一生の最後に唯一の別れの声をあげる、そのようなものとして考えられている。そろそろリサイタル活動はこのあたりで終りにしようかという年齢の演奏家が、この作品をとりあげることもしばしばのようだ。

しかしもちろん、シューベルトの「白鳥の歌」は、夭折した彼の、人生の苦悩と希望のまっただなかに作られたもので、とうてい、ゆきついた人生の果ての悟りの境地とは程遠く、最後のしめくくりに配されている「鳩の便り」では、＜あこがれ＞が歌われているのである。

当夜の演奏は、もう十分にご自分の歌となりきった自由自在さで、シューベルトの若々しい激情もみずみずしい情念も、すべてのびのびと伝わってきた。

3 月をもってフェリスの専任を退官されるという機会に、このリサイタルが企画されたのかもしれないが、ご本人は、もう学務から解放されて、これからは何をしてもいいのだ、と楽しげに言っておられたので、この「白鳥の歌」が、アデューの意味もふくめて考えられたとすれば、それは拘束と責任の多い今までの教育のお仕事をなしとげられた喜びのアデューと、新生活を迎えられる期待とから成りたっているのであろう。

アンコールの 3 曲の軽快さとしあわせな気分が、それをよく表わしていて、私たちは晴れやかな気持ちにひたりつつ帰路につけた。いまはもはや人生 70 年から 80 年、あるいはもっと。薄命のシューベルトの時代とは大違いである。渡邊氏の今後の自由闊達なお働きと、ねがわくばバッハ普及への深いコミットとを期待している。

美しい一夕を、ありがとうございました。

受難曲と美術作品 ④

白木 博也（後援会員，画家）

オリーブ山とゲツセマネの祈り

最期の晩餐ののち、キリストはエルサレム郊外のオリーブ山（ゲツセマネの園）に弟子たちとともにやってきた。キリストは弟子たちを残し、ひとりで天にむかって祈る。

■ドゥッチォ・ディ・ブォンセーニャ（1255/60－1315/18）
イタリア・シエナ、ドゥオモ美術館

＜「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた＞（マタイ 26：36）

■ 同図部分

＜弟子たちのところへ戻ってご覧になると、彼らは眠っていたので…＞（マタイ 26：40）

次回定期演奏会（2006年5月13日）演奏曲目の紹介

カンタータ第194番「大いなるこの日 新たの宮を」
„Höchsterwünschtes Freudenfest“ BWV194

【解説】

初演：1723年11月2日（ライプツィヒ着任初年）.

おそらく前年までのケーテン時代に作られた表敬用世俗カンタータBWV194aを基にして，ライプツィヒ近郊シュテルムタールの教会堂とオルガンの献堂式に際して演奏された．主日礼拝用としては，翌1724年6月4日，三位一体節に再演されている．

なごやかな音色の，オーボエ3とファゴットの管楽器による4声体で冒頭合唱が書かれ，それに弦合奏が加わる．ケーテン時代の原曲のもつ，明るく素朴な雰囲気をつたえて，演奏時間に40分もかかる大がかりな献堂式の音楽を，新しく献げられた神の家への，安らかな希望の祝祭のような装いに仕立てている．

教会の献堂式の機会に，現在でも大いに歌われてよい内容に満たされたカンタータである．特定の聖書章句との結びつきはない．

作品全体は長いので，曲の順序を一望してみよう．

第1部
1. 合唱
2. レチタティーヴォ ┐ (B)
3. アリア ┘
4. レチタティーヴォ ┐ (S)
5. アリア ┘
6. コラール

第2部
7. レチタティーヴォ ┐ (T)
8. アリア ┘
9. レチタティーヴォ ┐ (S／B)
10. アリア ┘
11. レチタティーヴォ (B)
12. コラール

独唱は，アルトをのぞくソプラノ，テノール，バスの3人だが，第1部はバスとソプラノ，第2部はテノールとソプラノ・バス二重唱で，神と信徒との対話のように，新しい神の家をめぐって，活発なやりとりを交わしてゆく．

合唱は，冒頭合唱（第1曲），第1部の終りのコラール（第6曲），第2部の終りのコラール（第12曲）の3箇所で全体の枠づけをし，新しく献げられたこの家が，地にあっては拠るべき幕屋となり，旅立ちの終りの日までわれらを守りはぐくむ住まいとなるように，との祈りを貫く．

独唱は，ガヴォット（第5曲ソプラノ・アリア），ジーグ（第8曲テノール・アリア），メヌエット（第10曲ソプラノ/バス二重唱）などの，軽やかな舞曲のリズムで祝典の華やぎを表わし，2曲のコラールは，会衆一同の真摯な祈りである．

コラールは，第6曲がJ. ヘールマン〈まことなる神よ，われ主に訴う〉Johann Heermann „Treuer Gott, ich muß dir klagen“（1630）の第6，7節．第12曲がP.ゲルハルト〈目覚めて，わが心よ，歌え〉Paul Gerhardt „Wach auf, mein Herz, und singe“（1647）の第9，10節．

第1部

1．合唱

2分の2拍子のフランス風序曲に前後を囲まれた，4分の3拍子の対位法的な合唱が，献堂の喜びを，明るくはずむように歌いかわす．昂揚したソプラノ声部が，高いハ音を2回も出すが，全体の勢いで無理なく自然に声が出るようである．

2．レチタティーヴォ（バス）

セッコ・レチタティーヴォ（通奏低音のみを伴う）で，バスが高い声域の晴れやかな祈りを献げる．「この教会堂をみ恵みの座 喜びの家となしたまえ」

3．アリア（バス）

シチリアーノの牧歌風リズムで，2.につづく高声域で，夜の闇にも輝いて立つ，みごとな教会を仰ぎみる誇らしさと安らかさを歌う．オーボエ1と弦合奏．

4．レチタティーヴォ（ソプラノ）

セッコ・レチタティーヴォ．神の慈しみによって，この世とわれらの至らぬすべてがきよめられ，感謝の歌を献げられるように．

5．アリア（ソプラノ）

弦合奏をともなったガヴォットで，神の炎でわれらが強められるようにと，リズミカルに力強くくりかえす．

6．コラール

(前出)「…心の炎 / わが終りの日 / 港に入るまで / 保たしめたまえ」

第2部

7．レチタティーヴォ（テノール）

第2部を始めるセッコ・レチタティーヴォ．「聖(きよ)き宮よ 世の塵を掃き清めよ」と，われわれに積極的な参加をうながす．

8．アリア（テノール）

通奏低音のみによるジーグのリズムの上に，喜びをはげしく歌い，「しりぞけ世の驕(おご)り」と言い放つ．

9．レチタティーヴォ（ソプラノ／バス）

これも簡単なセッコ・レチタティーヴォだが，問いかけるソプラノにバスが応答しながら，「主は信仰を嘉(よみ)しわれらと共にいまさん」と両者が共鳴する．

10．アリア（ソプラノ／バス）

オーボエ2と通奏低音，4分の3拍子のメヌエットで，「大いなるこの幸」と，至福に満たされ，「開けなが心 主いますこの家に」と，教会生活の最重要なことばを伝える．

11．レチタティーヴォ（バス）

短いセッコ・レチタティーヴォで，「心の内のみならずこの家に主はいます」としめくくり，聖霊にみたされた教会であることを祈る．

12．コラール

(前出)「…われを祝して / なが幕屋となし / み言葉たまえ / 旅立ちの日まで」

曲それぞれに豊かな想念のもとに構成され，そこに含まれた内容をかみしめると，曲ごとに心が沸き立ってくる．演奏時間は長くても，愛らしく親しい感じの祝祭カンタータである．（大村恵美子）